

ナルドの香り

2016年6月5日、新潟福音集会
ゴットホルド・ベック

ルカ

18:31 さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。

18:32 人の子は異邦人に引き渡され、そして彼らにあげられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。

18:33 彼らは人の子をむちで打ってから殺します。しかし、人の子は三日目によみがえります。」

18:34 しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。

ルカ

19:1 それからイエスは、エリコにはいて、町をお通りになった。

19:2 ここには、ザアカイという人がいたが、彼は取税人のかしらで、金持ちであった。

19:3 彼は、イエスがどんな方か見ようとしたが、背が低かったので、群衆のために見ることができなかった。

19:4 それで、イエスを見るために、前方に走り出て、いちじく桑の木に登った。ちょうどイエスがそこを通り過ぎようとしておられたからである。

19:5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」

19:6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

19:7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた。」と言ってつぶやいた。

19:8 ところがザアカイは立って、主に言った。「主よ。ご覧ください。私の財産の半分を貧しい人たちに施します。また、だれからでも、私がだまし取った物は、四倍にして返します。」

19:9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのですから。

19:10 人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」

話す前に私はいつも変な祈りを捧げます。『イエス様、今から私のしゃべっていることを誰も聞かないで、あなたの言わんとしていることを聞かせてください。』そういう、心構えがあれば主は必ず憐れんでくださいます。

4つの福音書では大切なのは、イエス様との出会いそのものです。どうして、当時の多くの人々はイエス様のところに行ったのでしょうか？もちろん、時間をつぶすためじゃない。病気のため、孤独になったから、結局、絶望してしまったから当時の人々はイエス様のところへいったのです。

彼らは皆、結局、イエス様から何かを得ようと期待していたのです。わがままなんですけど、イエス様だったら何とかなる。あきらめる必要はない。もちろん、イエス様のところ行ったけど、無駄でしたと言う人は一人もいなかった。『行ったのはよかった』、とみんな、感謝の気持ちでいっぱいです。

イエスの呼びかけとは、皆さん、ご存知です。マタイ伝、11章、28節、『すべて、疲れた人…、』多くの人はあいさつの代わりに、『こんにちわ』とは言わないで、『疲れた』といひます。そういうものだよ。思うとおりに行かないから疲れます。あまり、おもしろくないけれども、イエス様は、『わたしのところに来なさい。休ませてあげます、』と、約束してくださいましたのです。

今読まれましたルカ伝 19章のザアカイの話を見てもわかります。あの男は、結局、現代人の多くと似ています。お金、お金、お金。金持ちになれば、幸せ。心配しなくてもいい。彼は金持ちになったけど、心は満たされていなかった。つらかったに違いない。

けども、イエス様は彼の家に行くようになったんです。何と、何と、何を話されたか、もちろん、わかりません。天国に行ったら聞いてみましょう。

結局、今までお金、お金、お金としか考えなかった男が、全財産の半分を悩んでいる人にあげたい、間違ったやり方で取った金は4倍にして返します。そうすれば、残るお金はあまりなかった。けれど、金だって別にどうでもいいと、ザアカイははっきり分かったのです。

今、話したように、イエス様はいかに忙しかったのか、想像できません。結局、皆、うわさを聞いたんです。イエス様のところに行くと、決して無駄ではない。絶対に後悔しない。

けれども、当時の人々は、現代人と非常に似ていますが、イエス様から、何かを得ようと思った人々は非常に多かったんです。イエス様に何かを捧げようと思った人は、当時、あまりいなかったし、今日でもそうではないでしょうか。

その少ない人々の中でいわゆる、ベタニアのマリヤという女性がいます。イエス様によっておおいに褒められた。他かの人は、彼女のように褒められた人は一人もいなかった。いったい、どういう方だったのでしょうか？マルコ伝から2~3か所、お読みいたします。

マルコ

14:3 イエスがベタニヤで、らい病人シモンの家におられたとき、食卓についておられると、ひとりの女が、純粋で、非常に高価なナルド油のはいった石膏のつぼを持って来て、そのつぼを割り、イエスの頭に注いだ。

14:4 すると、何人かの者が憤慨して互いに言った。「何のために、香油をこんなにむだにしたのか。」

もったいない！

14:5 この香油なら、三百デナリ以上に売れて、貧乏な人たちに施しができたのに。」そして、その女をきびしく責めた。

ちょっと、気の毒だったね。まったく誤解されてしまったのです。けれども、きびしく責められた方のために、イエス様が入ったんです。

14:6 すると、イエスは言われた。「そのままにしておきなさい。なぜこの人を困らせるのですか。わたしのために、りっぱなことをしてくれたのです。」

14:7 貧しい人たちは、いつもあなたがたといっしょにいます。それで、あなたがたがしたいときは、いつでも彼らに良いことをしてやれます。しかし、わたしは、いつもあなたがたといっしょにいるわけではありません。

14:8 この女は、自分にできることをしたのです…

最高の褒め言葉です。イエス様がそういわれとき、うれしかったに違いない。

14:8 この女は、自分にできることをしたのです。埋葬の用意にと、わたしのからだに、前もって油を塗ってくれたのです。

14:9 まことに、あなたがたに告げます。世界中のどこでも、福音が宣べ伝えられる所なら、この人のした事も語られて、この人の記念となるでしょう。」

今日は彼女の記念会だね。彼女のことについて、考えると恥ずかしくなる。

14:10 ところで、イスカリオテ・ユダは、十二弟子のひとりであるが、イエスを売ろうとして祭司長たちのところへ出向いて行った。

14:11 彼らはこれを聞いて喜んで、金をやろうと約束した。そこでユダは、どうしたら、うまいぐあいにイエスを引き渡せるかと、ねらっていた。

どうして人々の間に、成長の違いが出てくるのでしょうか。イエス様を信じる人々とは、もちろん皆、救われています。すなわち、イエス様の愛を体験的に知るようになりました。私たちはしばしば、自分がイエス様に対して、どのような関

係にあるかということよりも、自分が何を成すべきかという事を大切にされる者なのではないでしょうか。私たちが、通り良き管になるためには、イエス様との密接な交わりが、どうしても必要です。

主との愛の交わりがなくなれば、使命感が薄れ、祈りが少なくなり、祈りをしたくなくなり、余裕を失い、神経質になります。今、読みましたマリヤという姉妹は、高価なナルドの香油を主イエス様に注ぎ出したのです。この行ないは、心からの愛の表れでした。すべてをイエス様に捧げたいというのが、彼女の心からの願いでした。今、話したように、彼女ほど、イエス様に褒められた人は一人もいなかった。

『この女は、できる限りのことをしたのだ。』イエス様の判断でした。この言葉は、イエス様が全く満足されたことを表しています。彼女は、イエス様だけが真の幸福と本当の平安を与えられるお方であることを経験しました。ですから彼女は、心からの愛のしるしとして、この高価なナルドの香油を捧げました。彼女の心は、感謝と愛でいっぱいだったのです。

聖書の中心は、十字架につけられた、罪滅ぼしのために、犠牲になられた主イエス様です。この十字架につけられたイエス様について、聖書は次のように言っています。

イザヤ

53:4 まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

53:5 しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

53:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。

まことの喜びの根拠、また、みなもとは今、読みましたことです。聖なる神は、我々のすべての咎を十字架につけられたイエス様に負わせた。罪滅ぼしのために、イエス様は代わりに罰せられ、呪われ、捨てられた。ひどいと言えません。もっとひどいことはないのではないのでしょうか。

馬鹿らしいと考えてる人もいます。なぜなら、イエス様の捧げられた血潮は、イエス様の命だったのです。私たちのようなつまらない、どうしようもない者のために、このような代価を払うのは、ちょっと考えられません。

けれど、私たちの大部分、イエス様に出会った人々は皆、喜んでいて、ありがたい。イエス様が代わりに罰せられ

たから、私たちは裁きに会うことがない。もうすでに、死からのちに移されていると確信できるのです。

十字架につけられたイエス様から、目を離してはならない。これは新約聖書の中の最も大切な命令です。ヘブル書をちょっと見てみましょうか。

ヘブル

12:1 こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

走るとは何ですかね？答えは2節でしょうね。

12:2 信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。イエスは、ご自分の前に置かれた喜びのゆえに、はずかしめをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されました。

12:3 あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。

前に読みましたルカ伝 18 章に戻りましょうか。

ルカ

18:31 さてイエスは、十二弟子をそばに呼んで、彼らに話された。「さあ、これから、わたしたちはエルサレムに向かって行きます。人の子について預言者たちが書いているすべてのことが実現されるのです。

18:32 人の子(私)は異邦人に引き渡され、そして彼らにあざけられ、はずかしめられ、つばきをかけられます。

18:33 彼らは人の子(私)をむちで打ってから殺します。しかし、人の子(である私)は三日目によみがえります。」

18:34 しかし弟子たちには、これらのことが何一つわからなかった。彼らには、このことばは隠されていて、話された事が理解できなかった。

けれども、この弟子たちとまったく違ひまして、ベタニアのマリヤという女性は、イエス様の埋葬の用意にと、イエス様の身体に、前もって油を塗ってくれたのです。このマリアの心は感謝と愛でいっぱいでした。彼女は、ただ一つのことを思ったでしょうね。いかにして、主イエス様に対する愛を表したらいいかな。いかにして、イエス様に対する感謝を表すことができるでしょうか、と思ったに違ひない。

けれども、その時、彼女はナルドの香油のことを思い出したのです。このナルドの香油は、非常に高価なもので、一人の人が一年間働いて得る所得に等く、7500 人分のパン

を買うことができたほど高価なものでした。それですから彼女は、自分のためにですら、それを使うことができなかつた。もったいないと思ったのです。まして、他の人々のためにそれを使うはもちろんできなかつたのです。

けれども、突然、彼女はイエス様ならば、その香油はちょうどふさわしいものと思い、それによって自分の愛を表すことができると考えました。そして、イエス様は、このマリヤの行ないを非常に喜ばれました。全き愛が、全き愛だけがイエス様を十分に喜ばせることができます。けれども、他の人々の反応はどうでしょうか？

マルコ

14:1 祭司長、律法学者たち(当時の聖書学者たち)は、どうしたらイエスをだまして捕え、殺すことができるだろうか、とけんめいであった。

考えられないことなのではないでしょうか？隠された妬みは、憎しみに変わり、イエス様を殺そうという決心になってしまったのです。一方の人々は、いかにしてイエス様を殺そうかと考えており、今、見てきたマリヤは、いかにしてイエス様に対する自分の愛を示すべきかと考えていたのです。彼女は、自分のすべてを捧げざるを得なかつたのです。ここにイエス様の一人の弟子、ユダという男は、結局、黙ることができなかつた。文句を言ったのです。

マリヤの行ないは馬鹿らしいことであり、無駄な事だと思つたのです。もつとうまい使い道があるのではないか。もしも7500人の貧しい人たちに食事をさせる方がよいのではないか。もちろん、皆さんはご存知でしょう。例えばユダは、貧乏人に対する同情や思いやりの心でそう言ったのではない。貪欲な守銭奴だったからです。いかなる理由で人々は、それぞれ異なった態度をイエス様に対して取るのでしょうか。

今、話したように当時の聖書学者たちは、彼ら自身の名誉を求めただけなのです。彼らは、自分たちが尊敬されなくなるのではないかと心配しました。妬みは憎しみに変わり、イエス様を殺すという事に至つたのです。ユダは金だけを欲しがり、もつともつと欲しいと思つたのです。彼は、盗みをし、それから、偽善者そのものとなり、そして、裏切りをして、最後に自殺してしまつたのです。

けれども、マリヤはいかにして自分の愛を、イエス様に示すことができるだろうか、真剣に考えました。イエス様を愛することができるのは、イエス様に罪を赦された者だけです。罪を赦された者は、自分の罪を認め、告白して、それを捨てる者だけです。このような態度を取らない者は、自分中心的な生き方をし、自分の事だけを考えるのです。不幸への早道です。

イエス様が十分に(自分のことを)考慮されない、あるいは、(自分が)ちやほやされなければ、すぐに自分の殻に引きこもる人、あるいは、離れる人、当時いましたし、今もそうなのではないでしょうか。

私たちは、次の問いについて考えるべきではないでしょうか。すなわち、私はイエス様に対して、本当の愛を持っているのでしょうか？私はイエス様との交わりを持つとうとして、イエス様の御許に近づいていきたいと願っているのでしょうか？私の考えや感情の中心は、本当にイエス様でしょうか？私は、義務感で主に仕えるのか、あるいは、愛によってイエス様に従うのでしょうか？

今、一緒に考えてまいりましたマリヤという女性は、心からの愛をイエス様に捧げたから、イエス様は、彼女を非常に喜ばれたのです。けど、私たちはいかにしてイエス様を喜ばせることができるのでしょうか。マリヤは、イエス様の足もとに座って、イエス様のみことばを聞きたいと切に望んだのです。ただ聞くだけではなく、みことばに服従する心がまえて聞いたのです。彼女は、忙しかったと思う。時間がなかったけど、みことばを聞く時間を作ったのです。

私たちは、聖書を読むだけではなく、聖書に聞かなければならない。聖書に聞く時間を作らない人は、イエス様を、本当の意味で愛しているかどうか、問題です。イエス様のみことばに対して開かれている耳を期待されます。イエス様を愛することの第一歩は、イエス様のみことばを聞くことであり、祈りながら主に近づくことです。すべてその他の事は、別にどうでもよい。大切なことではない。枝葉の問題です。

マリヤは、ただ単にイエス様のみ言葉を聞いただけではなく、イエス様に話しかけました。彼女は、イエス様の所に行ってみことばを聞き、イエス様に話しかけることだけが彼女の切なる願いでした。我々の場合には、私たちの祈りの中心は、自分の考え、自分の計画、自分の問題なのではないでしょうか。

私たちは、イエス様ご自身よりも、イエス様が我々に与える祝福の方を好むのではないのでしょうか？そういうのは決して、マリヤの持っていたような愛ではない。マリヤは、まず最初に主のみことばだけを聞きたいと願い、次にイエス様だけに語りたいたいと願い、そして最後に、主にすべてを与えたいと心から願いました。

彼女は、イエス様の足もとに座って、みことばに耳を貸したのです。彼女がしたように、イエス様の足もとに座り続けることなしに、祈りの生活は成り立ちません。彼女は、イエス様が自分を全く欠けたところなく愛しておられることをよく知っていたので、マリアもイエス様を、少しも裏切るところなく愛していたのです。彼女は、非常に値の高いナルドの匂い油を、イエス様の頭に惜しげもなく降り注いだのです。

すなわち、ためらうことなく、余すところなく、匂い油を、イエス様に降り注ぐことにより、イエス様に対する愛を示したのです。このナルドの匂い油の匂いが家全体を満ちたと聖書は言っています。

それと同じように、愛の雰囲気かわれわれの心、家、また、各集会を包んでいるのでしょうか？黙示録の中で、非常にたいへんなことが書かれています。

黙示録

2:4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。

初めの愛とは、何でしょうか？イエス様との交わりのことです。イエス様なしに何事も欲せず、何事も成し得ないということです。もし、日々、主のみことばである聖書が、私たちの泉となり、私たちの慰めとなり、私たちの力となり、我々の知恵となっているならば、そして、私たちの考えと行ないの中心に、イエス様がおいでになるならば、それこそ、私たちの初めの愛が保たれていることの証拠です。

当時のエペソの兄弟姉妹の心は、もはやイエス様との親しい交わりの中にはなかったんです。主の足もとに静まることを忘れてしまったのです。その結果、イエス様はもはや、私はあなたと共にいるということができず、わたしは、あなたに対して対立すると言わざるを得ないことになったのです。

初めの愛とはなんのでしょうか？二心の無いイエス様への愛であり、真の謙遜であり、直ちに従うことであり、そして、イエス様の再臨を心から待ち望むことであり、そして、兄弟姉妹に対して真心からの愛を持つことなのではないでしょうか。

主は何を望んでいるのでしょうか？結局、聞く耳を持つことです。主よ、お願い、語ってください、しもべは聞いております。この心構えがあれば、主は喜ぶだけではなく、我々は多くの人々にとって祝福になるにちがいない。

おわり